

溺れたゴジラ

「トーホー怪獣サーカス」は辺境惑星巡回専門のサーカス一座として、興行界にちよつとは名を知られた存在だった。人気スターといえば、空中ブランコのコモスラ父子、綱渡りのヘドラ、オートバイ乗りのラドン、道化のエビラとカマキラス。最近では中国服を着たエビラがキング・ギドラの頭をたたいて、「レッド・スネーク・カモン」などとやるコミック・ショーが結構受け、興行的にはまずまずの成績を収めていた。

しかし脚光を浴びるスターの陰には、衰え、見捨てられる者があるのもこの業界のならい。中でもかつて三次元ランポリンで一世を風靡したゴジラの凋落ぶりは目を覆わせるものがあつた。全盛期には銀河帝国皇帝の御前で

その至芸を披露し、シリウス十字星章まで賜った名人上手が、今では道化の露払いを命ぜられ、観客の痛罵と嘲笑を一身に浴びているのだから。

それでも人気が落ち始めた当座は、大スターの貫禄と誇りが演技の隅々にまでみなぎり、三回転宙返りのフィニッシュに放射能火炎を高々と吹き上げる姿などは、千両役者の美しい晩年をさえ予感させるものだった。だが、実際にうろこに白いものが混じり、しつぽの振りにも力がはいらず、火炎の射程が全盛期の十分の一にも達しなくなると、さしもの気力も萎え始めた。デビュー以来欠かしたことのなかった稽古も休みがちになり、最近では日がな一日空をながめ暮らすことも多くなった。

ゴジラに映画出演の話が舞い込んだのは、そんなある日のことだった。

出演交渉に訪れたプロデューサーの前では渋い表情を見せながらも、団長は内心しめたと思っていた。一座の興行こそ順調だったが、団長は宇宙船の

ローンや何やらで、個人的に相当の借財を抱え込んでいたからである。

「困りましたな。うちとしても、今あいつに抜けられるのは痛いんで、ね」
「そこをなんとか団長さんのお力で」

「まっ、わかりました。あいつにも最後の花道を飾らせてやりましょっか。なんといつても昔はうちの花形だった男だし、この話を聞かせてやればシャキッとしますよ、シャキッと。万事はわたしにおまかせください。ところで、契約金のご相談なんです……」

ところが団長の思惑に反して、ゴジラは首を縦には振らなかった。なだめすかし、おだて、団長はあらゆるくどきのテクニクを駆使したが、ゴジラを説得することはできなかった。

最後に団長は、「この恩知らず！」とひと言吐き捨てると、手にした鞭を荒々しく振って控え室を出ていった。

「キングゴングのやつみたいに恥をさらしたくはないからな」

じいさんはあとで、親友のモスラに向かつてこう漏らしたそうである。

かつて怪獣サーカス界の二枚看板だった旧友キングゴングは、トーワ・サーカスの団長と二人がかりの説得に負け、しぶしぶ映画出演を承諾させられてしまった。しかし肝心の映画の出来は最低、客の入りも悪く、責任を感じたキングゴングはどこかへ雲隠れしてしまったという。じいさんはそのことを言ったのである。

ゴジラの出番はこの日を境に半分以下に減らされてしまった。もっとも落ち目の芸人の出番が減ったところで、困るような観客はひとりもいなかったが。

そして時は流れ、星は巡り、ゴジラはさらに辺境をまわるトーホー・ビデオ・サーカスに売られていった。

ある時、この一座が銀河辺境にある余りなじみのない惑星に降り立ったことがあった。銀河中心圏から遠く離れ、一流サーカスの興行コースからもはずれたこの惑星では、彼らのような弱小サーカス一座でも大歓迎だった。

興行先のひとつになった海沿いの町では、興行が決定した日からサーカスの話題で持ち切りになり、子供たちは本物の怪獣に会える日を指折り数えて待った。だから空から一座を乗せた銀色の宇宙船が舞い下りてきた時には、男の子も女の子もほんとうに有頂天になったものだった。

「あつ、ガラモンだ」「バルンガだ」「ガマクジラだ」「あつ、カネゴンだ」子供たちはタラップに降り立った怪獣たちを見て、口々に叫んだものだった。でも、最後に足もとのおぼつかないゴジラがよろけ出たときには、子供たちの声はなかった。誰も名前を思い出せなかったからである。しばらくして一人の子供が、「あつ、レッド・キングだ！」と、うれしそうに叫んだ。

「そうだ、レッドキングだ、レッドキングだ」と、他の子供たちも和した。ゴジラは子供たちの大合唱に苦笑いを浮かべながらも、十八番の火炎放射を空高く吹き上げてみせた。それを見た座員たちは、こんなに上機嫌の、また、見事に火炎を吐くゴジラを見るのは本当に久しぶりだと思った。

そして待ちに待ったオープンングの日がやってきた。その日は、町の紳士、淑女方が一堂に会し、テントの中はさながら一大社交場のような華やかさに満ちた。団長が花形スターを左右に従えて開演の口上を述べると、それだけで待ちかねた観客からは嵐のような拍手が巻き起こった。

プログラムが始まると、座員たちは皆、近来にない熱演を繰り広げた。怪獣たちにとつて、この惑星はことのほか思い出深い星だった。

悪の帝国に雇われていたありし日、彼らは侵略の先兵として、この星の防衛軍相手に大暴れした。決して自慢できた話ではないが、青春の熱い血潮を

たぎらせたという共通の思いは、未だに座員たちの強い絆になっている。

演技を終えた座員たちは、準備運動に余念のないゴジラの肩をたたきながら、次々に励ましの声をかけていく。老芸人にとつては、ここが懐かしい生まれ故郷でもあることをよく知っていたからである。

この日のゴジラの演技は、全盛時をほうふつさせるすばらしい出来だった。前方三回宙返りジャックナイフ形、後方二回宙返り二回ひねりシッポ立ちなど、十八番技が次々に繰り出された。とりわけ、自らの火炎で空中に炎の輪をつくり、その中を後方四回宙返りでぐり抜ける「火炎車」という技が披露された時には、余りの歓声に急ごしらえのテントが激しく揺らぎ、団長の顔を一瞬青ざめさせたほどだった。

満場のアンコールにゴジラは自分の演技に満足した時のポーズ、「シエー」を連発した。残念なことに、今となつてはそのポーズの由来を知る観客もな

かったが。

控え室に戻ったゴジラを座員たちの拍手の列が迎えた。

「おいつ、やったな。あれならだいたいじょうぶ。まだまだ現役でいけるぞ。よしっ、明日から出番はトリの前だ！」

ゴジラの肩を抱いた団長が興奮した声で叫んだ。しかしすべての力を出し尽くしたゴジラは、流れる汗に目をしばたかせながら、ただ静かにほほえむばかりだった。

この日を最後に、ゴジラの姿は座員の前から消えてしまった。地元の警察や消防団を動員した必死の捜索にもかかわらず、行方はようとして知られなかった。深夜、海辺へ向かうゴジラの姿を見たという者もあったが、真偽のほどはわからなかった。

それから数カ月後、中国は福建省泉州にほど近い漁村に一頭の怪獣が流れ

着いた。怪獣はずいぶん長い距離を泳いで来たともえ、岸にあがった時にはすでに息も絶え絶えだった。

波打ち際に巨体を横たえた怪獣を最初に発見したのは、その日の漁に備えて船の点検に来た若い男だった。

「海から龍が出て来たぞ」

男は大声で叫びながら、村中に触れ回った。あわてて外に飛び出した村人たちは、海辺を塞ぐ小山のような姿を認めると、慣れた手つきで家財道具をまとめはじめた。それから子供たちの手を引いて、いつせいに裏山に避難し始めた。

そんな中、避難の列から取り残された者たちがいた。早いうちに両親を亡くし、今は漁の手伝いで生計を立てている幼い兄妹である。いや、取り残されたというよりはむしろ、彼らはこの不思議な動物に興味を持って、自発的

に居残ったのである。

怪獣の前まで歩いていった二人は、話しかけてよいものかどうかとしばらくためらった。それから兄よりも賢く、勇気もある妹が最初に口を切った。

「ねえ、あんた、どこから来たの？」

「わしか？ わしは海の向こうのアメリカという国から来たんじやよ」

「じゃあ、アメリカのスパイ？」

女の子の可愛い質問に、怪獣の口がゆっくり動き、そこからかすかな笑みがもれた。

「いや、わしはサーカスの芸人じやよ。アメリカの小さな町でサーカスの公演をやっておつてな、そこから泳いできたんじやよ」

「ねえ、この人サーカスの人なんだって」

「じゃあ、なにか芸をやれよ」

兄が生意気な口を利いた。

「いや、わしはもうトシだし、ずいぶん長い距離を泳いできたから、もう疲れて死にそうなんじゃ……」

老ゴジラの声はそのまま消え入りそうなほど弱々しかった。

「かわいそうね。いまわたしがコーシャのおいしやさんをよんであげるわ」

「ありがとう、親切なお嬢ちゃん。ところで、ここはいつたいどこじゃね？」

「チュアンチヨウよ」

「チャンチヨウ？ 日本じゃないのかね」

「ちがうわよ、チュアンチヨウよ」

「福建省泉州だよ」

兄の言葉を聞いたゴジラの口から深いため息が漏れた。

「そうか、やはり日本じゃなかったのかね」

「ねえ、サーカスの人がなににきたの？」

「フフフツ、わしはな、お嬢ちゃん。日本へ行こうとしていたんじゃよ。思
い出の大坂城や東京タワーの前で最後のひと暴れをしてやろうかと思つて
な。まあ、今となつてはどうでもよいことじゃが……。それより、元気なこ
ろのわしの芸をお嬢ちゃんに見せられなかったのが残念じゃ。大きくなつた
らビデオでも買って見ておくれ。じゃあ、さようなら」

こうしてゴジラは息を引き取った。

このころには、危険はないとさつた村人たちが山からぞくぞく降りてき
た。その中に兄弟の名を呼びながら走り出てきた婦人がいた。日ごろからな
にくれとなくふたりの面倒を見てきた近所のおばさんである。

「ごめんなさいね。おじいちゃん、おばあちゃんと逃げるのにせいっぱい
で、あんたたちのことすっかり忘れてたわ。でも無事でよかった」

「ねえ、おばさん。にほんてなあに？」

お婆さんの腕にきつく抱きしめられながら、女の子がたずねた。

「にほん？ にほん、て。昔この海の向こうにあった小さな国のことかな。でもその国は、もうずいぶん前に地震と噴火で海の中に沈んでしまったのよ。その、にほんがどうしたの？」

「あのりゅうのおじさんねえ、にほんにいきたかったんだって」

科学技術院から派遣された調査団が駆けつけたころには、怪獣の肉はあらかた持ち去られてしまっていた。盗んだ肉で焼き肉パーティを開いた村人の何人かが司法の手で罰せられた。

いま、その巨大な骨格は北京博物館の主要展示物のひとつになっているという。

©1984 新戸雅章